支部だより

【東京支部総会】

～立ち上がろう 福島～

台風19号が上陸・首都圏接近と賑わせていた10月13日（月・祝）に第31回原町高等学校同窓会東京支部総会が、上野精養軒で正午より開催されました。朝から今にも降り出しそうな空模様のもと果たして何人の方がお出掛け頂けるのか心配しておりましたが、遠くは宮城県や静岡県からの方を含め、百五十名近くの方に出席して頂きました。

総会は川鍋裕夫氏（17回）の司会で始まり、最初に出席者全員でこの一年に亡くなられた方々への冥福を祈る黙とうをいたしました。黙とう開始と同時に上野公園内の寛永寺時報堂で打ち鳴らされる梵鐘の音が会場内に響き渡り故人を忌んでいるようでした。続いて紺野政弘支部長（11回）の挨拶があり、事務局より平成25年度会計報告は原案通り承認されました。その後来賓の方々の挨拶が続き、渡辺一成同窓会長（14回）の挨拶があり、この4月より原高の校長として着任されました松岡浩三先生の挨拶と続きました。その話の中で総会前日12日に群馬県前橋市で行われた「全日本吹奏楽コンクール・小編成の部」に東北大会を1位で突破して出場した原高吹奏楽部の様子が報告され、銀賞の栄誉を得たとの紹介もありました。また奥村修平同窓会事務局長（37回）より原高の現状、生徒たちの進路、部活動等の状況についての報告があり、第一部が終了いたしました。

第二部では、東京支部設立のため準備段階より尽力されて初代支部長となられ、長い間支部発展のためご苦労された同窓会前顧問の馬場正男氏（相商1回）が、体調を崩されて脱会されることとなったため、感謝状と記念品（大堀の相馬焼）を送ることを提案し、満場一致の賛同により、贈らせて頂きました。

第三部の懇親会も乾杯の後に懇談に入り、再会を喜び合う人、暫くぶりに合う友人、先輩、後輩達と尽きない話題で盛り上がり、時間が過ぎて行きました。宴も闌になったところで、鯉江徹氏（1回）の尺八による演奏、植田千芳氏（6回）の相馬民謡の唄、高橋千恵子さん（2回）、佐藤保雄氏（5回）の指導で合唱があり、渡瀬あつ子さん（46回）によるライブ風ステージと続き、会場は最高の盛り上がりをみせました。最後は渡辺一成同窓会長（14回）の音頭で原町高校校歌の大合唱で三時間に及ぶ総会・懇親会の幕を閉じました。

次回の第32回総会は、平成27年10月12日（月・祝）に上野精養軒で正午より開催する予定です。

進学・就職される皆様、またご家族で原高を卒業された首都圏に住まわれる方に、支部総会にぜひ出席を賜り、懐かしい方と親交を交わして場を盛り上げて頂けることを望んでおります。同窓会本部まで御一報下されることをお待ちしております。

東京支部事務局
上遠野　康彦（十四回卒）

馬場正男氏（相商一回卒）へ
感謝状と記念品を贈らせていただきました。

原高生への活動支援について

同窓会は、校内の他組織と協力体制をとりながら、独自に後輩生徒諸君に対し支援している。東日本大震災後、特に東京支部からの義援金は、一度はあきらめかけた生徒会行事、即ち在校生を「原高生」たらしめる活動を演出した。地元における同窓会活動の活性化を期して、平成23年1月に同窓会組織の強化策を検討し、それを受け「活動協力金」の募金活動を始めた。地元が震災と原発事故からの復興を果たすにはまだ時間がかかると見込まれる中、原高で学ぶ生徒に引き続き支援していきたいと考える。この場を借りて今年度いただいたご支援を紹介し、改めて御礼申し上げる。

一「活動協力金」募金について
（一）件数　百二十八件
（二）金額　四七万一二六〇円
（振込手数料差引後の金額一月三十一日現在）

平成27年の活動協力金は4月から受け付けますので、ご協力をお願いします。詳細については原町高校HPの「卒業生の皆さまへ」をご覧ください。

平成26年度同窓会一般会計予算書

1　収入　（単位：円）

項目	本年度予算額	前年度予算額	増減	附記
会費	451000	438000	13,000	1,000円×451名
協力金	1000000	1000000	0	1,000円×1,000人
繰越金	1103079	409,939	715,117	25年度繰越金
雑収入	515	387962	▲ 256,523	預金利息
合計	2,554,594	2,083,000	471,594	

2　支出

項目	本年度予算額	前年度予算額	増減	附記
総会費	50,000	50,000	0	
役員会費	10,000	10,000	0	
通信費	50,000	50,000	0	切手、ハガキ
消耗品費	20,000	20,000	0	事務用品等
慶弔費	50,000	60,000	▲ 10,000	花輪代、外
褒賞費	70,000	60,000	10,000	卒業証書バインダー
事務局費	0	0	0	同窓会事務局会計へ
広告費	40,000	40,000	0	新聞広告料
印刷費	0	0	0	
旅費	60,000	40,000	20,000	東京支部総会、他
支部助成費	0	0	0	各支部補助金
会報発行費	90,000	80,000	10,000	会報印刷代、他
活動費	200,000	200,000	0	
積立金	200,000	200,000	0	周年事業基金
会館維持費	150,000	150,000	0	会館維持備品
部活動支援費 会館修繕費	1,000,000	1,000,000	0	ボイラー修理、合宿補助
予備費	564,594	123000	441,594	
合計	2,554,594	2,083,000	471,594	

【小高支部】

復興に向けて

新年を迎えたと思ったら早や一月も半ばを過ぎ、卒業式を目前にし、3年生はラストスパートの時期となった。まさに光陰矢のごとしである。日本海側は連日の雪模様、これに比し吾が浜通りは何と恵まれた地域であろう。感謝するのみである。あまりに恵まれすぎ？なのか、会津地方では偉人が比較的多いようだが、浜方部も大いに頑張ろう。

今年も三月を控え広報原稿の依頼を受けたが、小高区は、ここ四年無人状態ゆえに同窓会支部活動は、まったく休止状態である。行政区長等を通じ住所等を調査しても個人情報云々でまったく手の施しようもない始末、法改正等を考えこのような震災等を復興させる手立てを講ずるべきと考える。高校卒業、成人式を終え、国に、地方に大いに貢献しようと熱意を持っているのに、一歩社会に踏み出したら能率の上がらぬこと必至である。このような事でこの難局で国興し町興しの効率的成果は望めない。

一年後いよいよ小高区に戻り同窓会支部活動を復活するが、役員改選の上、若手会員を迎え、大いに後輩と語り、小高区本来の活動をしたいものである。そして、浜通り代表校の原町高校の文武両道を備えた発展に大いに貢献したいものである。

小高支部長　西内　眞介
（相商六回卒）

【神戸訪問】

一月十七日で阪神淡路大震災から二十年の月日が流れた。

昨年の八月、原高放送部の一年生二人を「特定非営利活動法人エフエムわいわい」が神戸に招いてくれた。「震災がつなぐ交流」の中で復興のマチづくりを学ぶというものだった。

あの甚大な被害を受けた長田の街は、今では駅前から商店街が整然と配置されており、新しくきれいなまちという印象を受けた。当然のことながら、震災の爪痕をそこで見ることはなかった。訪問二日目に、神戸復興塾・神戸国際大学の大津先生たちに案内され、実際に長田の「まち」を歩いた。明るい商店街の人たちとの交流は楽しいものだった。震災から復興を果たした彼らの関心は東北に向いていた。ありがたいことだ。神戸の人たちは常に福島のことを考えてくれている。

話を長田のマチに戻す。不思議なことに案内役の誰もが、きれいな町並みにも整然と立ち並ぶ建築物にもまだまだ納得していない様子だった。一緒に街を歩き、震災前の様子を聞き、街の雰囲気を感じたりするにつれ、大津先生が思わず発した「間尺に合わない」という言葉が理解できてきた。長田の街並みは復興を果たしているようにみえる。ぼんやりと歩いただけでは何も気付くことはない。ただ、今もって、この「まち」がそこに暮らす人々と調和しきれていないということなのだ。復興のまちづくりには正解も終点も見つからない。

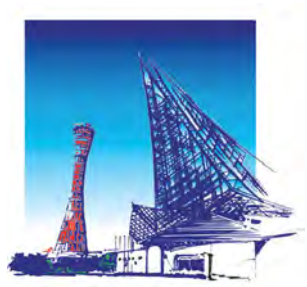
神戸訪問の初日には黒田裕子さんとの出会いがあった。黒田さんは災害ボランティアの草分けであり、災害看護の象徴的存在だ。被災者と直に向き合うために、看護師の職を辞しボランティアの世界に入った人だ。「人と未来防災センター」で、初めてお会いした。一緒に阪神淡路大震災の映像を見た。街が地震で壊れていく恐怖は、津波とは、また違う感覚をもたらす。想像を絶する恐怖にはリアリティーがなく、映画か何かの世界に入り込んでしまったかのようであった。実際、今回参加した生徒の一人は震災時に津波を目撃しているが、いまだにそれをきちんと処理し切れてはいない。防災センターには黒田さん自身のコーナーも設けられており、その場で直接お話していただくという貴重な経験ができた。現在の東北の仮設住宅には黒田さんの多くのアイディアが生かされている。改めて感謝したい。

黒田さんは言った、「真の復興は、人の復興、人の暮らしの復興である」と。九月二十四日、黒田さんが亡くなったという知らせを受けた。突然のことだった。何だか黒田さんが、福島の高校生二人に今後の復興への希望を託していったような気がする。

あらためて思う。復興って何だろう。

最終日、ラジオ関西での収録を終え、パーソナリティの西條遊児さんが神戸の街を案内がてら、新神戸駅まで送ってくださった。いろいろお話してくださったが、やはり、神戸の街が復興するには十年以上の月日を要したとのことだ。

さて、我が原町高校も来年度はクラス数四の中規模高校としてスタートする。私たちに必要な復興策は果たして何だろうか。

放送部副顧問　髙野　庄一
（三十三回卒）

「人と未来防災センター」にて黒田裕子さんからお話を伺う